

『富山県教育広報』一九五三年八月(富山県)

教育革新の有力な武器

国立教育研究所 矢口 新

学習とは観念をおぼえこむことであると長い間考えられて来た。教科書にかかれたことをおぼえること、先生の言う言葉をおぼえることだと考えられて来た。要するに言語によって学習が成立すると考えられて来たのである。この伝統は今でも強い力をもっていて、教材といえば、言語によって提出されたものがまず考えられ、他のものはその補助だと考えられるのである。

最近視聴覚教材などと言われるが、それも一般の人々には大体教科書の補助だというように考えられているようである。確かに現実的には、すぐれた視聴覚教材がつけられておらず、その量も乏しくて、補助としてしか使えない状況にある。併し本質的には決してそういう教材は補助ではないのであって、言語によるものこそむしろ補助なのである。このことがはつきり認識されなければ、視聴覚教育などといつてもお座なりのことにすぎないのである。

今知識の教育を一例として考えてみる。

知識をもつということとは、言葉をおぼえるということではない。物、そのものに迫るといふことである。自然について知識をもつ、社会について知識をもつというものは、自然や社会について言われた言葉を知っているとということではない。自然や社会そのもののすがたをみていふということである。その場合ただみているのではなく、整理してみているのである。その整理をする際の道具が言葉なのである。

例えば花について知識をもつというのは、花そのものを整理してみているということである。花にはいろいろな種類があるということを知っているというのは「この花にはいろいろな種がある」という言葉を知っていることではない。実際に花そのものをならべて、その異同を弁別してみているということである。このことは社会のことについても同様である。民主主義とはこれこれかくかくのことであるというよきな抽象的なことでも、ただその言葉を知っているということが民主主義について知識をもっているということではない。やはり世の中の事実を整理して、これは民主主義、あれはそうでないものと区別してみているということである。それをお互に語り合う時には、言葉を使わなければ通じないから、言葉を道具として語り合うのである。

知識とはこのように事実そのものに迫るところから成立して来るのであるから教育によって人間に知識をもたせようとするときに、何が大切な教材であるかということとは、自ら明らかであろう。教材とは広く人を育てる媒介物となるものの義であるが、この場合は知識をもたせる媒介としての教材を考える。物そのもの、自然そのもの、社会そのものが人にその知識をもたせる媒介となるのである。言葉はその時使われる符牒にすぎない。

視聴覚教育ということが言われるのは、そういう物そのものすがたを学校に持ちこもうとする考え方のあらわれなのである。学校はこれまで、言葉の世界で教育が成立っていた。今も、そのものを学校へ出来るだけもちこんで真の教育を成立させようと考えているのである。視聴覚というのはそのあらわれなのである。

このような人間を育てる真実の方法が中々成立たないのは、われわれが過去の惰性によって教育を考えているからである。また現在それをさまたげる様々な障害が現にあるのである。

例えば入学試験などというものがある。これは本当に人間が知識をもっているかどうかを試験するのでなく、言葉だけを使って試験をす

るのであって、ただその枝葉末節の言葉を知っているかどうかをみるのである。それは一時的に言葉をおぼえることによって突破出来るのである。そこでその突破のために、言葉だけの準備が行われる。それは真の教育ではないが、真の教育をおしのけて、教育の座にすわっているのである。そうして子供は何年間も、そういういつわりの世界に住まわされる。そして入学試験は突破したが、本当に知識を身につけた人間とはならない。学校を通じて出て来たというだけであって、教育はうけていないのである。こういう恐るべき事態があるにもかかわらず、人はそれに気がつかないでいる。世の中の人々の常識が教育というものを、そういういつわりの姿で考え、それを当り前とし、その無用の浪費たることに気がつかずにいるのである。

教育者こそは、そういういつわりの教育を追放する先達とならなければならぬのである。

現在視聴覚教材は言語による教材の補助として使われている。このことはそれが本来の使命を果していないということである。例えば最近、地理・歴史の体系的知識などということが盛に言われる。体系的知識をもつことが必要なことは当然至極のことであるが、その場合に言葉による教材によってそれを持たせようとする考え方がすべての人の常識である。そうなると曾てわれわれが読んだ教科書のように、第一章関東地方、一府六県に分れて云々というようなことになる。

こういうように言葉で書かれたものをよむことが知識をもつことだと見誤られるのである。これは社会のすがたそのものを整理してみているのである。人の整理した結果をただ受けとっているのである。それは自分自身が見ようとして見たのでないから、大げさに言えば、チンプンカンプンなのである。ただそういうものだとして捧暗記ということになるのである。

自分で一体日本の政治はどういう風に行われているのか、地方の政治はどうなのかという問題をもって、社会を見て行く、そして、そこ

に都道府県という行政単位があるのだ、それはかくかくの理由で、こうなっているというように整理した時に、本当に知識が体系的に身についたのである。体系的に知識が身につくためには、はっきりした問題があつて、それが視点となつて、自然や社会がみられるということが必要なのである。

視聴覚教材が使用される時に、多くは言語の教材の補助として使われるために「第一章 関東地方」式のチンプンカンプンの言葉の系列の中でみせられる。そしてただ印象をあたえるというように使われている。これは視聴覚教材が、誤つた教育の手のひらの中に入っているということである。

視聴覚教材は問題をもって、物そのものに迫っていくという学習のための教材なのである。このことが明らかに認識されていなければ、本当に使われたということにはならない。

私がこういうことを言うのは、何もことさらにむつかしいことを言っているのではない。視聴覚教育というようなことを言つて、映画や、幻燈や放送施設等に変な金をかけていて、而も本当に教育をしていないということであつては、もつたいたいと思うからである。何もそういう教材や施設を利用するということが大切なのではない。問題は真の教育が、人間を育てる方法が正しく行われるということなのである。視聴覚教材の利用というも、その方便なのである。

流行だからというので施設をもち、教材を使っているが、頭の中は昔の教育観を一步も出ていないというのが現在の日本には極めて多いようである。それはもつたいたいことである。

以上、私は二つのことを述べてみた。学習は問題をもって、物そのものに迫ることである。そこに視聴覚教育を位置づけるということである。それが教育の革新の道なのである。視聴覚教育は教育革新の道具として最も有力なものであるという自覚をもたなければならぬ。